

尙便宜上こゝに記して置くべきことは、本書中に取り入れられて居る漢語の事である。漢語がそのまゝに、もしくは少々變化した音で回鶻字に寫されて、本書の中に用ゐられて居るものは少くないが（例へば、下の譯述I第四行 *caqtsi*＝冊子の如く）、此等については別に一括して論ずる機會に譲るとして、こゝには別に、漢語の成語を漢字で書いた儘に、直に下の回鶻文に續けて用ゐたものと、また回鶻語の接尾語を、漢字で書いた漢語の下に續けて、此等の兩者によつて初めて完全な意義を有する成語となしたものと、の兩様の例について記して置きたい。前者の例は下の譯例IIIについて認めらるゝやうに、「是謂一者 *azrua buyan-i*」とか、「是謂二者 *azrua buyan-i*」とかいふ如きがそれで、此等の句は「是謂一者梵福」、「是謂二者梵福」の譯であるのを、梵福の二語だけを譯して、他は其の儘に漢字漢語を用ゐて居るのであり、(*azrua buyan* もまたソグド語、もしくは梵語から入つたものであるが) 後者の例は、同じ譯例中に認めらるゝやうに「福 *lar*」、「如來 *lar*」として、福・如來の複數を示したり（かゝる例はまた他の外國語、即ち梵語などを取り入れた場合に於ても認められる）、また「三 *uncé*」として第三の意を示すが如きがそれである。三は回鶻語で *ün* で、第三は *ününé* であるが、「三 *uncé*」とかいて何と讀んだか、次に擧げる例から推すと、多分 *ününé* と讀んだのであらうが、果して然らば我が國語で「三め」とかいて「みつめ」と讀んだ場合に相當しよう。更に一例を拾つて見れば、漢語の「天中天」に相當する語として、回鶻語には *tängri tängriisi burġan* といふ形があるが、本書 Ch. XIX, 001a には、之を「天天 *si burġan*」もしくは「天天 *si* 佛」と書いてある。天は回鶻語で *tängri* といふから、*tängriisi* の意を表はす爲に「天 *si*」を用ゐたもので、漢字を用ゐながら、之を讀み下す時には *tängri tängriisi burġan* といふた事を示すに足るものである。以上の諸例は我が